東京学芸大学・総合的道徳教育プログラム

第３回 道徳授業パワーアップセミナー のご報告

多数のご参加、ありがとうございました。

2012 年 8 月 10 日、本学の「総合的道徳教育プログラム推進プロジェクト」の主催による上記セミナーが本学の S410 教室で開催されました。当日は近隣三市や東京都内はもとより、北海道から沖縄にわたる全国各地から、現職教員及び教育関係者、教職を志す大学生等 207 名にご参加いただきました。

このセミナーは、本プログラムの第 1 プロジェクトの一環として、主として小・中学校の教員に研修の場を提供することを目的として開催されました。平成22 年度から毎年 8 月に実施しており、回を重ねるごとに規模が大きくなっています。

3 回目の本年度は、次のテーマの下、開催されました。

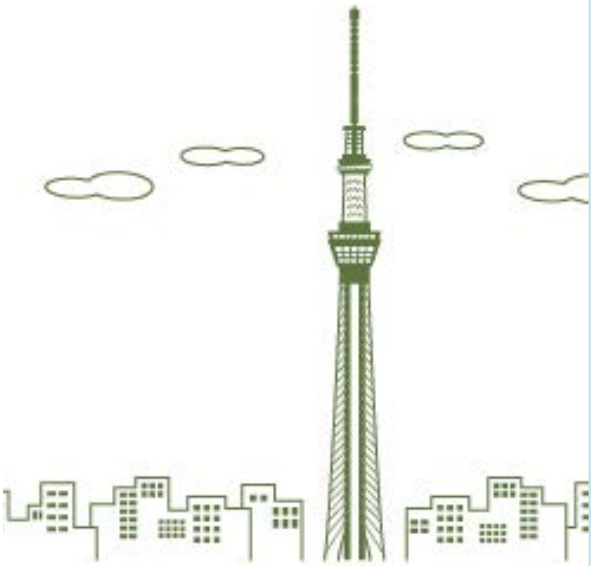
「新学習指導要領が本格始動！
これからの道徳教育を展望して、道徳授業の実践的指導力を高めよう」

セミナーは、以下に示すように、午前の (1) 講話に始まり、午後は (2) 道徳授業の実践発表、(3) パネル討議、(4) 地域住民からのメッセージ、(5) 全体協議と続きました。そのプログラムと提案内容の詳細は、当日配布冊子の各資料等をご覧ください。

開催された内容について、それぞれの概要を以下にご報告します。

セミナーの概要

(1) 本学道徳教育担当教員による講話	10：00－12：20
(2) 小・中学校教員による道徳授業の実践発表	13：20－14：25
(3) 実践発表に基づくパネル討議	14：25－15：20
(4) 地域住民の立場からのメッセージ	15：35－16：05
(5) 質問を受けての全体協議	16：05－16：40



(1) 本学道徳教育担当教員による講話

開会挨拶に引き続き、２つの講話がなされました。

まず、本学教員（永田繁雄）より「心の活力を育てる道徳教育」の観点から、その推進の在り方と、新学習指導要領が求められる道徳教育、道徳授業の一層の体質改善の在り方などについて講話がなされました。

続いて、本学教員（松尾直博）より、「様々な体験と語りが豊かな生き方を創造する」という観点から、学習指導要領における体験の重要性や、体験と道徳とのつながり（調査報告）、体験を豊かな生き方につなげる意義と手だてなどについて講話がされました。

講話①　新学習指導要領本格実施、いま求められる道徳授業

永田 繁雄（本学）

1. 子どもの中の生きて働く力＝「心の活力」を育む
2. 新しい学習指導要領が求める道徳教育・道徳の時間の充実
3. 豊かな道徳的学びで「生き方」を考える道徳授業をつくる
4. 道徳授業の一層の改善のための３つのポイント
5. 道徳授業の「壁」を可能性の「扉」に変える

講話②　体験を生かし，豊かな生き方を創造する

松尾 直博（本学）

1. 体験の大切さ（子どもを取り巻く社会の変化と道徳教育～学習指導要領より）
2. 体験と道徳（成人の道徳性と子どもの頃の体験に関する調査報告書より）
3. 体験を豊かな生き方につなげる（ナラティブ・アプローチ、生きる支えとなる物語）

(2) 小・中学校教員による道徳授業の実践発表

午後はまず、小・中学校の教員３名による道徳授業づくりの実践提案がなされました。

私と道徳授業（力のある授業づくりの実際）

提案①　子どもも教師も楽しむ道徳授業の創造 ～登場人物への共感を高める資料提示の工夫～

池田なほみ（東京都北区立王子小学校）

1. 楽しい道徳の時間とは
2. 実践事例
   ⑴ ファンタジーな読み物資料の特性を生かした、パネルシアターでの資料提示「わにのバンポ」（2-(3) 信頼友情）〔文溪３年〕
   ⑵ 生活場所の舞台を再現し、具体物を使用した教室シアター「ひみつのばしょ」（3-(2) 自然愛）〔文溪２年〕
   ⑶ 道徳実践に結び付く主人公のおにぎり作りの追体験「まんまるおにぎり」（4-(3) 家族愛）〔学図１年〕
   ⑷ 人間の生き方に迫る、効果的な補助資料の活用「どこかで誰かが見ていてくれる～福本清三」（4-(3) 役割・責任）〔文溪５年〕
   ⑸ 感動資料の原作からエッセンスをプラス「しあわせの王子」〔学図３年〕

⑹ 学校への敬愛を高める自作資料「がっこうって　いいな」（4-(4) 愛校心）〔自作１年〕

3. 楽しさの変容

提案②　子どもの学びの連続性をつくる道徳授業の創造 ～子どもの問いから学びの連続性をつくる～

幸阪 創平（東京学芸大学附属世田谷小学校）

1. 授業の主張
2. 主張に迫るための子どもの歩み
   ⑴「よりよく生きる」をテーマにした「道徳価値マップ」の作成
   ⑵「テーマから資料を決めて語り合おう」という授業づくり
   ⑶「道徳の時間①」と「道徳の時間③」をつなぐ「道徳の時間②」の設定
   ⑷「資料からテーマを決めて語り合おう」という授業づくり
   ⑸ 子どもの問いから問いをつくる道徳授業作り
3. 子どもの歩みをふまえた次時のポイント
   ⑴ 子どもの学びの向かう先を考える
   ⑵ 子どもの問いが生きる発問づくりⅠ～価値や概念に迫る問い・資料のテーマに迫る問い・資料の心情に迫る問い
   ⑶ 子どもの問いが生きる発問づくりⅡ　○価値の自覚化，自己を振り返る場をどう設定するか　～自分の立場を意識した問い～
4. 道徳座席表指導案①（2 ／ 3 時間目）、道徳座席表指導案②（3 ／ 3 時間目）
5. 授業の様子（3 ／ 3 時間目）
6. 考察

提案③　「語り合い（対話）」が生み出す，迫力のある道徳授業づくり

伊藤さゆり・岡田 幸博（愛知県あま市立七宝北中学校）

1. 学校現場での苦悩
2. 「道徳の時間」を活性化するための鍵
3. 考えられる授業改善の工夫（2 つの提案）
   ⑴ 生徒の発言で学びを深めていく授業展開の工夫
   ⑵「話すこと・聴くこと」が生み出すもの
4. 第 1 学年 A 組　道徳学習指導案
   ⑴ 主題名「父母を敬愛し，家族の絆を大切に思う心」（4－(6) 家族愛）
   ⑵ 資料名「三六五 × 十四回分のありがとう」〔あかつき 1 年〕
   ⑶ 本時のねらい
   ⑷ 指導過程
5. 第 1 学年 A 組　道徳授業・授業記録

参考　：研究の全体構想図

(3) 実践発表に基づくパネル討議

実践提案に引き続き、清水保徳先生（帝京大学）のコーディネートのもと、上記３名の提案者によるパネル討議が行われ、参加者からの質問や意見をもとに協議を深めました。

魅力と活力にみちた道徳授業をどうつくるか？

コーディネーター：清水 保徳　（帝京大学）
パネリスト　　：池田なほみ（東京都北区立王子小学校）
幸阪 創平　（東京学芸大学附属世田谷小学校）
伊藤さゆり・岡田 幸博（愛知県あま市立七宝北中学校）

【討議の概要】

1. 子どもたちの考えを中心に授業展開を進めていくとき、子どもの発言が多種多様であることから教師の意図が出すぎ、子どもたちの考えを制限することはなかったか
   - いい資料ほど、子どもの関心の向く、中心のはっきりしたものに問いが収束していく。そのため、教師の方から「これでいこう」ということは少なかった。
   - 資料から考える子どももいれば、経験で考える子どももいる。まずは価値や概念で尋ねることがよいと思う。
2. 資料中の主人公と自己を子どもはどう結びつけていくのか
   - 主人公の気持ちを語りながら、自分のことを語ってくれる子どももいる。展開の後段で自分についてじっくり考え語る時間をとることも大切にしている。
   - 教師が何を問いたいのかが一番重要だと思う。教師の投げかける発問のベースが何なのかが重要であり、それが授業のねらいだといえる。
   - まず資料の世界に感情移入をさせて、そのあとで資料の中で得られた価値観から飛び出て、自分自身のこととして考え価値観を構築するという授業の流れにしている。
   - つらい経験をもった子どもがいるときに、言いたくなければ黙っていてもよいし、座っていてくれてもよいのだが、途中で泣けてきても座らずに最後まで発言してくれた子どもがいた。自分の体験を資料にのせて話そうと思える、そんな集団が素晴らしいと思う。
   - 中学校の実践をきいたが、教え子が危篤に陥ったこともあり、あまりにきつかった。あのクラスだからこそ死の話をするのは、やってしかるべきだと思う一方、自分の学級経営に自信のないときには難しいとも思う。
3. 自尊感情を高めるためにどのようなことをしているのか
   - 周りの受容性を大切にしている。どれだけいい話をしても、それを周りに受け入れてもらえなかったら、その子の自尊感情は育たない。心を教師が受け止め、生徒みんなも受け止める。まずはそこから授業のベースを作るようにしている。
4. 力のある授業に向けて大切なことは何か
   - 研究授業では取り上げられにくいＢ級グルメのような資料を紹介したが、このような資料でも子どもたちは楽しく授業が受けられている。楽しさを作ることで子どもの心が丸くなっていくのだと思う。
   - 学びの連続性と子どもの意欲を、道徳の時間でも大切にしていくことだと考える。
   - 意欲的な教師はどんどんチャンレンジすべきだ。紹介した実践のような授業をしていく中で、自分のことを話したくなる、友だちに聞いてほしくなる、クラスが温かくなる、さりげない優しい場面が増えていく。
   - 子どもが話した思いを授業の中で受容できる場面をどれだけ作れるかが大切だ。自分の話を受容してくれると感じる瞬間があるから、人は頑張れるのだと思う。
   - 子どもの発言、記録、事実に基づいて検討することを大切にしたい。「今までこう言われてきたから」ではなく「子どもがこう言ったから」「こう変わったから」という授業研究をやっていければ、道徳授業はもっと変わっていくことができるのではないかと思う。

(4) 地域住民の立場からのメッセージ

午後の後半は、石川県在住の和田真由美さんより、地域住民の立場からメッセージをいただきました。

地域住民の立場から道徳授業に望むこと

和田真由美（ゲストティーチャー経験者　萌の会代表・石川県在住）

メッセージの柱立て

1. 道徳の授業に参画して
2. ゲストティーチャーの役割とは
3. ゲストを生かすも殺すも先生しだい？
4. 地域住民や保護者はパートナー

【メッセージの概要】

- 平成 15 年度からこれまでに 200 校近くの小中学校でゲストティーチャーとして参加させていただいたが、ねらいの大切さを感じることが多かった。打ち合わせのとき、授業で話す内容を「和田さんにお任せします」と言われ、どんな授業にしたいのかわかりにくいこともあった。一方で、自分の体験談を生の資料としてどう生かすかということを指導案作りや打ち合わせの中で練っていただけると、とても助かる。
- 授業では、自作資料や私の話した言葉に気持ちが表れているのに「このとき、どんな気持ちだったでしょう」と、中心発問にしている授業が多かった。この時間で深めたい部分は本当にそこなのだろうか。子どもたちに何を考えさせたいのか、何を深めたいのかという点で、先生と打ち合わせが重要だった。また、授業の中で、子どもたちが様々な気持ちを自分なりの言葉で語り、大人が思い描いていた以上にいい意味で裏切ってくれ、学び合うという感動を何度も味わった。
- 道徳の時間にかかわるようになってその重要性を感じているが、保護者や地域の人は授業参観などで見ることはあっても、道徳で学ぶ価値や内容項目などはほとんど知らない。保護者や地域の人にもっと学校の道徳のよさを知ってもらい、道徳教育に関心をもってもらいたい。
- 私は闘病中に漠然と「命を使う、活かす」ということを考えていたが、その後の道徳との出会いは文字通り「使命」だと感じている。今回、紹介した曲の中にある「未来の君が手を差し伸べている」という言葉のもつ意味をぜひ、子どもたちに伝えて欲しい。道徳の時間は自分を作っていく時間。それを応援してくれる人は、子どもたちの周りにたくさんいる。時間を共有する中で、より連携が深まると思う。

(5) 質問を受けての全体協議

その後、登壇者すべてが参加して、本学教員（永田繁雄）のコーディネートによる Q&A と全体協議が行われました。

協議・Q＆A：９月からのために授業の可能性をひらこう

【協議の概要】

1. 授業づくり・学級づくりにおいて、言葉がけの点で気をつけていることはあるか
   - 言ってくれたことに対して、「よく言ってくれたね」という言葉がけをしている。発言した子どもだけでなく、周りの子どもも感じ取ってくれるものがある。
2. 授業のねらいが他の価値に広がりそうなとき、一つに絞るべきか
   - 家族愛の中に生命尊重の部分があり、生命尊重の中に家族愛の部分がある。道徳の価値項目は様々な内容が有機的にからめ合って存在していて、ときにはある部分が強く出て、他のときには別の部分が強く出てくるようなものだと思う。
   - テーマとずれている場合でも、生徒の出してくれた意見を素晴らしいとほめてあげるべきだと思う。多くことを感じ取っていることを大事にすべきだ。
3. 授業映像ではワークシートや筆記用具等がなかったが、いつもそうなのか
   - いつもなしにしている。自分の考えをまとめていく作業では書くことが大切だが、道徳の時間では、話の中で気づきが生まれることも踏まえ、優先順位として話をする作業が高いと考え、書く時間をなくした。
4. 「道徳価値マップ」で道徳的価値をどのように整理していくのか
   - 子どもたちがどの価値をやっていきたいのかを多数決で決めているわけではない。根拠を示してもらい、それに周囲の子どもがどれだけ共感できるかという観点で決めている。マップがベースになり、子どもたちが経験を価値に結び付けていってくれるのが大切なのではと思う。
5. 座席表指導案はどんなところが有効か
   - 手元にあると安心するという面もある。その子どもの発言に縛られるあまり、実際の子どもたちのかかわりが見えなくなることもある。そのようなときに、子ども同士の意見を結びつけるときなどに活用している。
6. パネルシアター等の工夫で楽しくなる一方でねらいが深まりにくいことはないか
   - 資料提示で人物の気持ちに沿わせ、資料の内容を理解し愛着をもてるように工夫している。そのような工夫でお話に集中して、主人公のことを考えたいという気持ちが湧き起こってくるため、子どもたちが資料から逸脱することはない。
   - 具体物を使うときも、使用の仕方を間違えずに、必要なものをきちんと与えることで、価値が深まっていく方向に向かうと思う。
7. いじめ問題でヨーロッパは年齢とともに仲裁者に変わっていく傾向が強いのはなぜか
   - 欧米圏は個を大切にするため、思春期や青年期に入っても「周りに迎合し正しいことを正しいといえない」ことは格好悪いという意識がある。一方、日本は「事を荒立てない」「多数に合わせて何も言わない方が…」というように、だんだんと傍観者になっていくというのが一つある。
   - ただし、ベネッセの最近の調査によると「友だちが悪いことをしたときに注意する」という項目では、小６・中１くらいが底で、中２ぐらいからは友だちが悪いことをしたときに注意するという意見比率が上がってきており、Ｖ字になっている。
   - いじめの概念は日本の方が進んでいる面もある。欧米では、2000 年代までは殴る蹴るがいじめ研究の中心だった。一方、日本の研究者は 1980 年代から「無視」や「悪口を流す」といったものもいじめに含めるべきだと主張していた。2000 年代を超えてから、ヨーロッパもアメリカでも、仲間はずれや無視もいじめの中核としてとらえる研究が増えてきている。

8. 家庭での親の価値観と、学校での価値観とのずれをどう考えたらよいか

・私は荒れる 80 年代に中高生だったが、その頃の学生の三分の一が教師を殴りたいと思っていた。その人たちが現在の保護者世代なので、今の保護者世代は結構学校に恨みをもっている人が多いのかもしれない。

・子どもは親を相対的にみることができるようになってくる。親を相対的に見ながら、正しいことを考えていく。先の話にもあったが、子どもたちはあなどれない。

9. 規範意識をどうとらえたらよいか

・社会的に価値ある、善とされるものを受け入れるという意識が規範意識であるとされる。最低限の規範意識は、「だめなものはだめ」「すべきものはする」という束縛事項があるようなものだ。それは、道徳というより生徒指導や個別指導に頼る部分が強い。一方、通常の規範意識は norm という言葉にある通り、normal なこと、当たり前のことが自然にできることだといえる。さらに、ごみを捨ててはいけないというルールは多いけれども、拾いましょうというルールはない。拾いたくなる意識がモラルだといえる。マナーからモラルに心を高めていくとき、「自分がせざるをえない」「すべきだ」と自分をコントロールする力が高まる。これが高い規範意識だと思う。

10. 「なぜ」「どうして」と発問すると心情や価値を深めることにならないのではないか

・「なぜ」「どうして」というのは、行為ではなく理由づけを問うことだと思う。行為を選択した後に、なぜこのようなことをしたのかを問い、理由づけを出していき、それをもとにまた討議する。心情をより深めるときには「なぜ」ときいてよいと思う。

・発問にもタブーや禁則を作らない。ただし、「なぜ」「気持ち」一辺倒になったときに、授業が落とし穴に陥っているときがあるかもしれないため、柔軟に使い分けることが必要かもしれない。

11. 授業のねらいをたてるときに心掛けていることがあれば教えてほしい

・価値に対するねらいと、資料からどうねらうかと、目の前の子どもたちに自分がかかわれるかという 3 つを考えて書くととても細かいねらいになる。

・ねらいの書き方には地域差があり、「この地域は資料についてここまで書く」「この地域は資料のことは触れない」「この団体はここまで書く／書かない」というのが見られる。ねらいは「主題＋資料」と示されており、ねらいと資料は基本的に表現を組み合わせないように書くことが一般的である。

12. 評価は必要か、評価はどうすればいいのか

・授業の筋道の中に質的な評価は様々に入っている。道徳の時間の量的な評価は、個別でやる場合にはかなり慎重にしなくてはならない。クラス全体の傾向は、量的には数値の上でとることはできるけれども、子どもの心の変化にかかわる部分は、数値的な評価ではなく、基本的には質的な評価を前提としなくてはいけないと解説書にも示されている。それは、通知表がないという考え方にも結びついていると思う。

13. 1 年生に敬虔の価値を考えさせることは難しいが、どう考えればよいか

・例えば、「花さき山」の資料を生かす授業は、感動させることがねらいではない。自分にとって美しさとは、感動することとは一体どういうことなのかを、子どもの自身が考えを深めることが重要だ。「ひしゃくぼし」の授業でも、クラス満天の星で感動させるのがねらいではない。自分の考えや、なぜそう思ったのかを深めていくのが道徳の時間である。それが価値観や生き方につながっていくと考えるようにしたい。

14. よい資料を選ぶのが大変だがどう考えるとよいのか

・よい資料は、毎時間、その都度探し出すわけではなく、広くパックして一定の計画を立てておいておくものだ。たとえば、震災であったり、様々な生徒指導上の課題、スポーツのヒーローの誕生など、今を生きている子どもたちは今の息を吸っているから、そのときに学びたいものもあれば、むしろ、それも織り込んでいくべきものだと思う。そのようなところで、よい資料の発掘に目を向けたい。

15. 価値観が対立したまま終わってしまう授業もあるが、どう考えればよいか

・子どもが真剣に考えたものは子どもなりの理屈なり、子どもなりの深い考えがあり、それが子どもの間でずれているのは自然なことだと思う。また、ねらいの到着点は、むしろ子どもによってずれてくるのが当たり前である。子どもたちをコントロールして、教師と同じ考えの小さな教師をつくっていくのは道徳授業の本旨ではない。

参考：受講者アンケートのダイジェスト

終了後、多数のアンケートをいただくことができました。
参加者から提出していただいたアンケートの結果を、以下にご報告します。

■ 回答者の所属

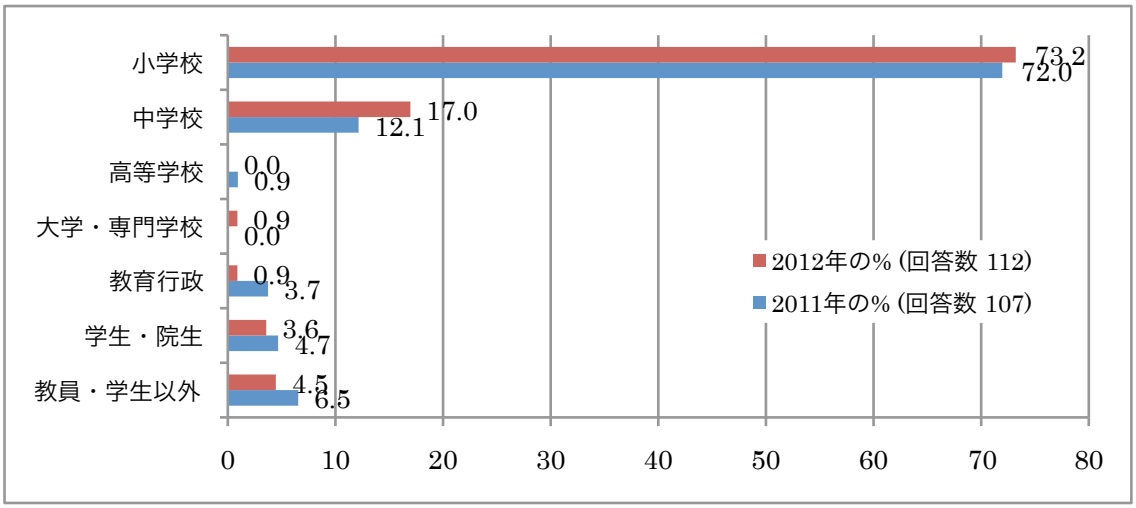


図 1. 参加者の勤務先

本年度も昨年度と同様、小学校、中学校の教員、なかでも小学校の教員が多かったことがわかります。

■ セミナーに参加した理由（2 つまで回答）

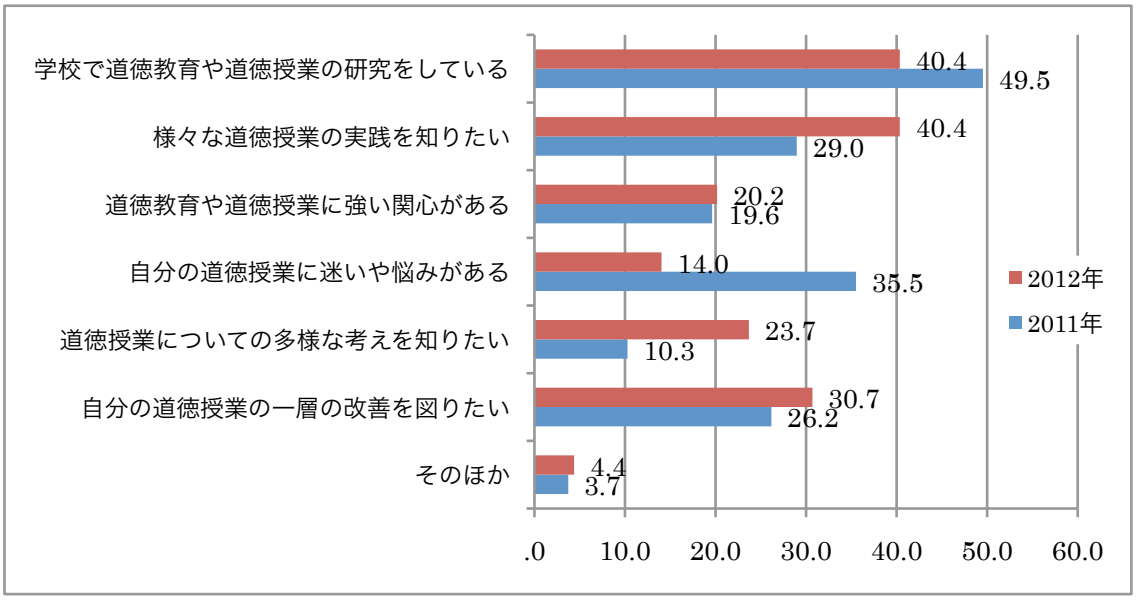


図 2. 参加理由の年度別比較（%。2 つまでの複数回答）

これらの様子から、2012 年は「研究している」「実践を知りたい」、「改善を図りたい」の順に回答が多く、2011 年に比べて「迷いや悩みがある」が減り、「多様な考えを知りたい」が増えていることがわかります。

■ 参加者の感想・意見

また、アンケートによって様々な感想やご意見をいただくこともできました。

記述していただいた回答の中で、参加された先生方の感想や意見の全体的な傾向が分かるもの（各概要）を以下に整理しました。

＜講話について＞

・実践的な話と、その裏付けとなるような調査結果に関連する話が興味深かった。
・場面発問やテーマ発問などにもその種類があることを知った。
・詳しい資料もありよかった。もっと時間があれば、ゆっくり聞けたと思う。
・パワーポイント資料が用意されていると、よりよいと思った。

＜私の道徳授業、パネル討議について＞

・自分は「基本型」の授業を中心でやってきたが、この頃行きづまりを感じていたので、多様な指導法の発表が参考になった。
・低・高学年、中学校の取組が紹介されたことで発達段階に応じた展開をみられた。
・資料提示の工夫の素晴らしさ、細やかに手をかけられている子どもたちへの愛情の深さに感服した。
・子どもにとって切実感のある道徳、そのための授業の連続はとても参考になった。
・生徒が自分の言葉で語る姿には迫力があった。
・授業を大いにしたくなった。沢山資料をいただけたのでこれからの参考にしたい。
・冒険的な授業の方が魅力的だが、子どもがどう変わっていくのか想像しづらい。

＜講師のメッセージ、Q&A について＞

・ゲストティーチャーの方からの本音が、大変参考になった。人様にお願いするからにはこちら側の意図もきちんと伝えなくてはならないと反省した。
・ゲストティーチャーに任せれば…ではなく、ねらいをはっきりとさせて、なぜゲストティーチャーを呼ぶのかを、よく考えることが大切だと感じた。
・フロアの考えを知れてよかったが、もっと時間が確保されているとよいと思う。
・思考がつながるので、パネル協議と Q&A は一つにした方がよいと感じた。
・壇上の背景が暗いとき見えづらかったので、壇上を明るくしてほしかった。

＜全体について＞

・今の子どもにも光があるのだと感じて、ほっとするところがあった。
・1 日充実した研修だった。私もいつか小学校で道徳の授業をしてみたいと思った。
・今日のテーマは、「更新」「バージョンアップ」だった。
・道徳授業のモチベーションが高まった。無論、現状は道徳授業だけに時間をさけるものではない。夏季休業中等を利用して少しずつ教案をつくりたい。
・子どもとの信頼関係が伝わってきた。早く子どもに会いたくなった。
・道徳に興味のある人たちがたくさん集まって行う勉強会は初参加だったが、とてもよかった。
・クラスの中に障害のある子どもがいる場合、どのように支援、指導されているかが気になった。
・午前の 2 時間通しは少し長いと感じた。1.5 時間ぐらいがちょうどいい。

＜今後役に立ちそうなこと＞

・授業を行う上で大切にすることや子どもの発言をひきだす方法などが分かった。
・今まで自分がやってきた型が決して不要なものでないと分かったことが一番大きな成果だった。
・今、小 1 を担任しているのでパネルシアターや教具はすぐにでも使っていきたい。
・子どもにとっての価値基準、価値の再更新等を考えていく必要性を感じた。

＜今後に期待したいこと＞

・ねらいの在り方、評価、資料を選択するポイントの講義をお願いしたい。
・近くの人との話し合い、かかわり合いなどをして情報交流などもしてみたい。
・子どもの心の活力が弱っている今だが、学校自体いろいろなことがありすぎて教師の心の活力も弱っている。担任が元気でないと子供の気持ちを受け止める器も小さくなってしまう。今後も担任の心の活力がでるセミナーであるとうれしい。

いただいた貴重なご意見やご感想を、今後の同事業や本学のプログラム全体の改善に生かしていきたいと考えています。ありがとうございました。

文責：柄本健太郎　構成：荻原香織